

工機を増産

本社隣接地に新工場

新工場は敷地面積が約3000平方メートル、5階建てで延べ床面積が約2800平方メートル。投資額は約億円で、本社工場（愛知県半田市）の隣接地に新設した。粉体を混合するミキサーや計量機器などを組み立てる。製品試験や従業員研修などのスペースも併設し、高機能化や高精度化を要求レベルが高くなっている。

同社は粉体機器の製造・販売が主力。食品メーカーは製品の差別化や衛生管理の高度化に向けて新規設備の導入に動いている。これを受け、11年に本社工場にレーザー加工機や溶接機を導入するなど順次、生産を強化している。



目を引く動作

「トルソ」がポーズをとりの胴体部分。杉浦機械設計は、このトルソに腕をつけて「腕付きトルソ君」シリーズ「ウインドー」などで「必要はある」と、杉浦富成人女性サイズ（9号）と、子供サイズの「hina腕4自由度で、胴体も回転するター」で、なめらかに動く。いったプログラミングも可能携帯電話）から遠隔操作で。顧客仕様の製作に応じる。

高粘度樹脂に対応

カワダ精工が事業開始

【岐阜】カワダ精工（岐阜県大野町、河田剛社長、0585・34・2055）は、樹脂射出成形機のノズルを、混練混合機能を持つミキシン

グノズルに改良する事業を始めた。ノズルの内径を加工し、新開発のツール（トビード）を装着する。価格は15万円から。対象機種によっては新品のミキシングノズルを出される際にうずを巻くため、色などが異なる複数の材料が良く混ざり、成形品の品質が向上する。ミキシングノズルでは難しかったポリカーボネートなどの高粘度の樹脂にも対応できる。

連で売上高倍増

ラミタロン、13年9月期

池材料関連向け売上も現在に比べて2倍上げる。電池材料のシステムのラインアップに二次電池向け旺盛な需要を取り（大阪・三島浩樹）

子を連続生産できる粉砕機「アルヒス」、粉体特性評価装置の最新型「パウダーテスターPT-X」などを電池材料メーカーに提案する。発売5年以上の製品の売上高比率を30%以上（現在は約15%）に引き上げる計画だ。また粉砕効率を向上し

製品拡充、需要取り込み

宮田清臣社長に事業戦略などを聞いた。

電池材料関連が好調

「リチウムイオン二次電池の技術は日本がリー

ドしており、主要材料の約半分を日本メーカーが握っている。一方、顧客の投資先は国内だけではなく、中国や韓国などの新興国に広がっている。約半分の売上高比率を30%以上（現在は約15%）に引き上げる計画だ。また粉砕効率を向上し

ホソカワミクロンは11年11月末に14年9月期を最終年度とする新中期経営計画を公表した。売上高420億円（12年9月期見通しは390億円）、営業利益42億円（同28億円）を目標に掲げている。目標達成に向けた具体策の一環として電池材料関連向けを強化する。

アリソグと業務提携契約を結びました。

国内でのプラントエンジニアリング、粉体機器販売、粉体受託加工の3項目で、両社の強みを生かした共同提案を展開し、シナジーを最大化する。10年11月に日清製粉グループ本社と資本提携後、複数案件を両社で手がけながら業務提携に向けた話し合いをしてき

新興国で事業拡大

いといけない。主力の粉が、これも増やす。中で、現地従業員向けに日本事業を中心に現地人材を確保・育成、アフター地域の合計売上高で14年

生誕百周年 不屈の改善魂

方式（TPS）の基礎を築界のみならず世界の産業界た故・大野耐一氏が2月に迎える。20日に発売する日発行の月刊誌「工場管理」れを記念して「大野耐一不屈の改善魂」特集を掲載す

工場管理 2月

による空洞化も懸念されている。特集では「たくさんつくれば安くなる」といった大量生産の考え方を否定し、ジャスト・イン・タイムの生産方式を実行して成果を残した大野氏の足跡と思想を見つめ直し、これからのモノづくりのあるべき姿を探る。

東京大学大学院の藤本隆宏教授、ジャーナリストの三戸節雄氏、大野氏から直接指導を受けた経験を持つ中部産業連盟会長の池淵浩介氏ら関係者、PEC産業教育センター所長の山田口善志氏らが

◆ブラジルに販売子会社
日本光電 19日、4月にブラジ会社「日本光電ブラジル」(サンを設立すると発表した。南米全域に売上高10億円を目指す。現在はミの駐在事務所が同地域を管轄し新会社の資本金は300万円(約00万円)。栗田秀一海外事業本業推進部長が社長に就く。

◆パナ積み船引き渡し
アイ・エイチ・アイマリンユナイテッド・エム、東京都港区、034・8900) 19日、呉工場(市)でプライト・アイランド・コシヨ向け5万6000重量型貨物運搬船「ユナイテッド・ハロ渡したと発表した。全長190米26米。